

「草枕」夏目漱石

山路(やまみち)を登りながら、こう考えた。

智(ち)に働けば角(かど)が立つ。情(じょう)に棹(さお)させば流される。意地を通(とお)せば窮屈(きゅうくつ)だ。とにかく人の世は住みにくい。

住みにくさが高(こう)じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟(さと)った時、詩が生れて、画(え)が出来る。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣(りょうどなり)にちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容(くつろ)げて、東(つか)の間まの命を、東の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降(くだ)る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑(のどか)にし、人の心を豊かにするが故(ゆえ)に尊(たつと)い。

住みにくき世から、住みにくき煩(わずら)いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画(え)である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云えば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧わく。着想を紙に落さぬともきゅうそうの音(おん)は胸裏(きょうり)に起おこる。丹青(たんせい)は画架(がが)に向って塗抹(とまつ)せんでも五彩(ごさい)の絢爛(けんらん)は自(おのず)から心眼(しんがん)に映る。ただおのが住む世を、かく観(かん)じ得て、霊台方寸(れいだいほうすん)のカメラに澆季溷濁(ぎょうきこんだく)の俗界を清くうららかに収め得(う)れば足(た)る。この故に無声(むせい)の詩人には一句なく、無色(むしょく)の画家にはせっけんなきも、かく人世(じんせい)を観じ得るの点において、かく煩惱(ぼんのう)を解脱(げだつ)するの点において、かく清浄界(しょうじょうかい)に出入(しゅつにゅう)し得るの点において、またこの不同不二(ふどうふじ)の乾坤(けんこん)を建立(こんりゅう)し得るの点において、我利私慾(がりしよく)の羈絆(きはん)を掃蕩(そうとう)するの点において、——千金(せんきん)の子よりも、万乗(ばんじょう)の君よりも、あらゆる俗界の寵児(ちようじ)よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐(かい)ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏(ひょうり)のごとく、日のあたる所にはきっと影がさすと悟った。三十の今日(こんにち)はこう思っている。——喜びの深きとき憂(うれ)いいよいよ深く、楽(たの)しみの大いなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片(かた)づけようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖(ふ)えれば寝(ね)る間(ま)も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかる。閣僚の肩は数百万人の足を支(ささ)えている。背中(せなか)に

は重い天下がおぶさっている。うまい物も食わねば惜しい。少し食べば飽（あ）き足（た）らぬ。存分食べばあとが不愉快だ。……

夏目漱石の「草枕」は、ネットの青空文庫で全文が読むことができます。著作権がなくなった文章を読むにあたっては、青空文庫が便利です。

一橋大学の入学試験には必ず擬古文が出ます。国語の第 2 問です。江戸から明治期の初期の文章を読む習慣が必要です。

もっとも、いつか夏目漱石も擬古文になる時代が来るのかもしれませんが。

夏目漱石は住みにくいこの世に対して、住むに甲斐があると規定しています。

三十の今日（こんにち）はこう思っている。——喜びの深きとき憂（うれ）いいよいよ深く、楽（たの）しみの大いなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片（かた）づけようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖（ふ）えれば寝（ね）る間（ま）も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかる。閣僚の肩は数百万人の足を支（ささ）えている。背中（せなか）には重い天下がおぶさっている。

こんなふうにした文章があるとホッとてしまいますよね。

夏目漱石は、49 歳にて、死んだ小説家です。「則天去私」「近代批判」「反自然主義」等、明治から大正の日本の精神を深く追求しました。

夏目漱石より 10 年も多く生きて、何もできない自分がいます。

生徒の皆さん。「心」「三四郎」「それから」等々夏目漱石の文章を紐解いてみてください。

